

十九年四月から自治会事務所へ行った。行ったとたん戦争激しなって、自給自足で開墾もせんらんし、道路作ったり、木を伐り出して筏に組んで海を渡してこっちの海岸へ持って来て製材したりした。わしは元気やし泳ぎ好きやし夏やったら筏の上に乗って昼寝したり、海入ったりした。

冬は大変なんや。けどこんなこともあったで。筏引っぱってもらう船舶待つ間に、わしら水の中手を突っこんでナマコつかんで生で食べてたら、船舶帰ってきて、職員が「あいつら幸せやなあ、この冷たいのに手を突っこんでわからへんのやから」言いよんねん。冷たいのん今でもわかるのにな。直接的にそんな言われたん、それ初めてや。

また石炭が三十屯ぐらいの船でくるでしょ。バラ積みしてあるので、カゴ棒の先にぶら下げて板を渡ってトロッコに山積みしたり、そんな仕事もよくした。そういう時代やったから病気がすんだわけ。昭和十九年には患者は一〇一〇ぐらいおったと思う。それが二〇年の暮れには六二〇か三〇人ぐらいになった。二年で四〇〇人ぐらい亡くなった。二十年の十一月頃には軽症寮と不自由者寮数棟を閉鎖したんですよ。

昭和十九年には、わし自治会の配給部におつてな、食料から寝具、ハブラシにいたるまで生活の一切の物品の配給の管理をする仕事やとつた。骨箱の管理までするんです。骨箱の在庫がなくなれば、木工部へ注文して記録する。昭和十九年度、一九〇何人か死んだよ、一年間に。五人に一人亡くなった。二十年度もそれぐらい亡くなったと思うよ。二十年の最後まではそこにいなかったから正確にはわからんけど、二十年度は二百人ちょっと越したんじゃないか。本病が重くなるより栄養失調で。

だから元気でその前の夕食一緒にして気嫌よく晩に寝て、朝、「起きて来んなあ」いうて、「おい、おい」いうて布団めくったら死んどつた、そういうことがようあつた。不自由舎なんか部屋で死んだ人がだいたいあつたね。なんせなあ、二十年だったか、十九年だったか、ちょっと憶えてないけど一週間に七人死んだ。

わし事務所で当直してた時、皆一週間ずつなんやが、わしは若いからこの方が寝やすいからいうて一カ月ぐらい続けて当直したことがあつたんや。その時に次から次へ死んでね。黒板に何日何時死亡、真宗とかキリスト教とか書くんやが、一週間でいっぱいになってしもうた。

一日に三人か四人亡くなって棺に入れて霊安室で解剖の順番待ちしとつたこともある。解剖して面会人が来るといえば、着物も着せてちゃんとしたけど、来ないとなるとそのまま全部釘づけです。棺桶の蓋ポンポンと打ちつけてしまう。解剖し頭割ったり腹切ったりしたそんなり簡単にパツと入れて、ほんで着るもんも上にさつと広げて被せてあるだけ。

木のはしごみたいなものの上に棺桶のせて落ちない様にロープでくくって四人で担いで歩いていくわけや。解剖しとるから、血とか血膿とか内臓の色んな病気あつたら、その腹水とかが葬儀が終って火葬場へ運ぶ坂道で流れてくるねん。それ、肩つとうてきて付いたこともあるよ。くさい。けどそんなにも馴れっこになつてしもうてね、こわいことだけど。